



自由律俳句協会

第2回 自由律の泉賞

テーマ…愛 句と鑑賞

第2回 自由律の泉賞

テーマ：愛

※投句者の互選による上位句

〈第1位〉

うしろ姿の無言を抱きしめる

平林 吉明（神奈川県）

〈第2位〉

愛なんてこれくらいがいいよ 月がきれい 井尾 良子（北海道）

〈第3位〉

暮らしのなべ釜少し隠して人が来る 荻島 架人（福岡県）

〈入賞〉

このごろの楽しみは夫の爪を磨くこと

佐川 智英実（山口県）

赤ちゃんポストのブザー鳴る朝

三谷 宜郷（福岡県）

朝摘みの花を供えて一日の始まり

竹内 朋子（山口県）

第2回 自由律の泉賞 応募作品詠草集

1 指の隙間を解ほどけた過去こよの紙こ繕よりの白さ

檜 幽可 (福岡県)

2 大粒のなみだ涙国境を越えて煌めく

白松 いちろう (千葉県)

3 愛なんかどうでもいい

行方ほいさつき (埼玉県)

4 自然に汗ばむ君のそば

木村 浩（埼玉県）

5 天ぷらの油ぽちぴちビール呼んでる

大岳 次郎（神奈川県）

6 ウクライナ壊れた日常を生きていく

和寄 はると（山口県）

7 億光年の星の海 僕らの一つの出逢い

金澤 ひろあき（京都府）

8 隣りに座れない45度の恋

原 さつき（愛知県）

9 赤ちゃんポストのブザー鳴る朝

三谷 宜郷（福岡県）

10 いのちはいつも光と陰

童家 まさゆき（新潟県）

11 逆縁なのだ夏薊、遙か西へ流れる飛行雲

植田 博（山口県）

12 庭にひまわり咲かせあの国への祈り

ちば つゆこ（静岡県）

13 句敵や進路語りしもと療友

神野 祐紀雄（愛知県）

14 孫の写真ラインに乗り次々と につこり

山本 説子（山口県）

15 踏み出せない背を押す母の小咄

吉原 陽子（愛知県）

16 うしろ姿の無言を抱きしめる

平林 吉明（神奈川県）

17 ほとばしる愛を咲ききり枯れた紫陽花

富永 鳩山（山口県）

18 朝摘みの花を供えて一日の始まり

竹内 朋子（山口県）

19 トイレットペーパーと愛語る猛暑日

野谷 真治（神奈川県）

20 危い響きでそれぞれのカタチ

富永 順子（山口県）

21 子や孫へ愛の気届け

田中 直心（静岡県）

22 目を閉じると幼い息子ら駆けて来る

黒瀬 文子（埼玉県）

23 百歳も百日紅愛で初の盆

中山 倭文子（福岡県）

24 炎天の巢門にみつばちたちの羽音

渡邊 旅人（福岡県）

25 一つの窓に灯が点り停年となって影る

小山 榮康（栃木県）

26 受けた愛に躓いて今がある 感謝

権代 祥一（山口県）

27 このごろの楽しみは夫の爪を磨くこと

佐川 智英実（山口県）

28 百合ひらくまで返事待つ

篠原 紀子（神奈川県）

29 頬づえの車窓は愛にうつりかわり

湯原 柳泉洞（長野県）

30 どうやら男らしいとまだ生まれぬ曾孫の話

久光 良一（山口県）

31 暮らしのなべ釜少し隠して人が来る

荻島 架人（福岡県）

32 病いの足し算身の引き算共に老いゆく

佐瀬 風井梧（千葉県）

33 金木犀の風静かに昔を囁く

部屋 慈音（山口県）

34 これが人生と指の隙間から零れる星屑

室伏 満晴（静岡県）

35 屋敷森点点タカなど棲まわせ川浴いの集落

大迫 秀雪（埼玉県）

36 愛なんてこれくらいがいいよ 月がきれい

井尾 良子（北海道）

37 あの頃の映画のように歩いてみるふたり

さいとう こう（東京都）

鑑賞——わたしの特選句

6 ウクライナ壊れた日常を生きていく 和寄 はると

▼ロシアの進攻が終わらない。「壊れた日常」が悲しい。 (野谷 真治)

9 赤ちゃんポストのブザー鳴る朝 三谷 宣郷

▼ブザーの音は鋭く重い。聞く人に一つの決意を促すものだろう。預ける人の苦悩や、その刹那の（おそらく言いようもない）心のありようを思う。すごい句です。 (童家 まさゆき)

▼仮に少女が妊娠出産したとき赤ちゃんポストのブザーを押します。その命は、医師や助産婦さんと看護師さんから里親に繋いで愛情いっぱい育てられてゆきます。そのような世の中にならなければなりません。 (中山 倭文字)

12 庭にひまわり咲かせあの国への祈り

ちば つゆこ

▼ロシアのウクライナ侵攻に成す術もないが、過酷な状況にある人々に思いを馳せ、庭にひまわりを咲かせた作者の平和への祈り。
(富永鳩山)

▼素晴らしいですね。明るく元気に咲くひまわりが見えてまいりました。同じように祈る毎日でございます。
(山本説子)

▼ロシア侵攻によるウクライナの悲惨な戦場跡のニュースを見聞きする度に気持ちちが沈んでしまう。一日も早く収束することを祈っています。(和寄はると)

14 孫の写真ラインに乗り次々と につこり

山本 説子

▼我が家も、写真ラインに乗って、息子から、妻や私に、グループラインで孫の寝返り、はいはい、掴みだち、などの姿が流れて来ます。次々と送られてくる絵を目で追います。本当にニッコリします。幸せな愛を感じる時間です。

(田中直心)

15 踏み出せない背を押す母の小咄 吉原 陽子

▼作者の物語と母の物語が交わって、小説のクライマックス直前のシーンを読んでいる気分になりました。母の小咄は、たぶんささやかなものだと思うのですが、人生を変えるのは劇的な何かより、意外とそういうものなのでしょうね。

(大迫 秀雪)

16 うしろ姿の無言を抱きしめる 平林 吉明

▼沢山の思いを抱えてる無言の背中。その思いを察して寄り添おうとする愛情深さが伝わる。

(富永 順子)

▼テーマは「愛」だったと思いますが、どうして愛と関係があるのか疑問に感じる句が多い気がします。そういうのは良い句でも外すことに致しました。さて特選句の「無言を抱きしめる」という表現に痺れました。後ろ姿は怒っているのか泣いているのか、ドラマが見える気がしました。

(権代 祥一)

▼うしろ姿が語る言葉なき奥の深い愛情がひしひしと伝わり、それを静かに心で抱きしめる作者の心情に共感します。
(三谷 宣郷)

▼ストリーが解ればとは思いましたが、ありふれたシチュエーションであつても、微笑ましく読ませて戴きました。
(檜 幽可)

▼「うしろ姿の無言」がなんとも印象的です。何も言わずに佇む背中からは溢れんばかりの想いが伝わります。その情念を受け止めるように抱きしめる作者の気持ちはどのようなものなのでしょう。想像が膨らみます。

(さいとう こう)

▼無言のうしろ姿はたくさんの言葉を語っている。
(久光 良一)

▼苦しみや悲しみに沈む人を支え込む。そんなシーンを思い浮かべた。たしかに心を交わせる愛のかたちが伝わってくる。
(金澤 ひろあき)

▼引き締まった表現に、濟まないという気持と切なさが込められて余韻が味わい深い。
(吉原 陽子)

▼喜びの時も悲しみの時も温かな温もりを感じます。
(竹内 朋子)

▼親の子への愛、恋人同士の愛……いろんな愛が浮かびました。言葉にできない感情は無言だからこそほとぼしるようにこぼれる気がします。 (原さつき)

18 朝摘みの花を供えて一日の始まり 竹内 朋子

▼「愛」という直接的なことには触れていないものの、ルーティーン化している情景を描くことでその背景にある深い愛情が伝わってきます。 (神野 祐紀雄)

19 トイレットペーパーと愛語る猛暑日 野谷 真治

▼どういう場面かなと思う。トイレットペーパーと、暑さはわかる。しかし、そこで愛なのか。トイレットペーパーに愛を語ったわけではなからう。トイレと愛との組み合わせが滑稽だ。しかし妙に絵に納得させられる句である。

(湯原 柳泉洞)

23 百歳も百日紅愛で初の盆 中山 倭文子

▼初心者ですので、好みで選ばせていただきました。 (木村 浩)

27 このごろの楽しみは夫の爪を磨くこと

佐川 智英実

※作者の申し出により冒頭を「ころごろ」より変更

▼日の当たる縁側でしょうか、それとも、介護の束の間でしょうか。実体験から、幸せとはささやかなものだど体感なされたのでしょうか。誠実に積み重ねてこられたご夫婦の信頼感が良くわかる句です。「ころごろ」は音符のクレッシェンド。だんだん強くそう思えるようになったことの、巧みな表現だと思いました：

(渡邊 旅人)

▼妻が逝って三年が過ぎました。その早さに驚きます。病床の妻の爪を切っていたことを思い出しました。温い句です。

(小山 榮康)

▼長い結婚生活、楽しいことばかりではなかった、今になってはみんないい思い出、そしていきついたところは夫の爪を磨くこと、深い絆を感じます。

(井尾 良子)

28 百合ひらくまで返事待つ

篠原 紀子

▼待つことの切なさ、尊さ、待ちわびるその時間こそが愛ではないでしょうか。

(平林 吉明)

31 暮らしのなべ釜少し隠して人が来る

荻島 架人

▼「少し隠して」という何気ない動作に、人の愛の機微が巧みに表現されていると思いました。

(室伏 満晴)

▼家に好きな人が、初めてくるのでしょうか。こざっぱりと片づけて、生活感のあるものをなんとなく隠す気持ちと読みました。恥じらいや高揚感が句に隠されているようで趣を感じました。

(篠原 紀子)

▼難しい句で理解できていないのですが、「少し隠して」この言葉に共鳴できるものを感じました。

(植田 博)

▼人を迎える気持がなべ釜を隠す所にさりげなく出ていてほほえましい。お客へのささやかな愛情か？

(黒瀬 文子)

32 病いの足し算身の引き算共に老いゆく

佐瀬 風井梧

▼80歳の峠を越すと、正に年齢を実感します。人並みにがんの宣告を受け、身体も手術に耐えられるのかどうかと不安になります。それが人生そのものなのだとは全く同感します。

(白松 いちろう)

33 金木犀の風静かに昔を囁く

部屋 慈音

▼今の季節に咲く金木犀その香りは強くも無く弱くも無い季節の変わり目を知らせる風がふく。

(萩島 架人)

36 愛なんてこれくらいいいよ 月がきれい

井尾 良子

▼愛なんて に愛をしっかりと見つけて付き合ってきた豊かな経験が伝わってきた、これくらいが とはたどり着いた結論でしょうか。間を取って 月がきれいに不思議な心の動きが感じられる。自由律の持つモダンリズムがいい!!

(部屋 慈音)

▼一読して、何てすがすがしいきれいな詩だろう。と思った。これくらいがいいよ　と言っているながら、実はとても深い愛を育んでいる作者。「月がきれいな」の展開に、喜びが溢れています。
(ちば つゆこ)

▼好意のある対象に優しくするのは当たり前で、愛なんて言葉にするのは勘弁してほしい。私も作者の横で、涼しい月を見てみたいです。
(佐川 智英実)

▼漱石先生は妻とうまくいってなかったらしいが、とにかく、I love youを「月がきれいですね」って訳したというから、ちよつとおもしろく思いました。

(大岳 次郎)

2022年11月27日 初版発行



発行 自由律俳句協会
編集制作 「自由律の泉賞」実行委員会
自由律俳句協会 企画・広報
オンデマンド冊子プロジェクト

自由律俳句協会 事務局

<連絡先>〒154-0012 東京都世田谷区駒沢2-28-14 中塚唯人方
e-mail:tadato8008@nifty.com TEL&FAX:03-3422-6962

自由律俳句協会

ホームページ：<https://www.自由律.com/>

ツイッター：自由律俳句協会@jihaikyo